

おおた たかゆき
大田 隆之 (平成25年度
人文・文化学群比較文化学類卒業)



“日常”を見つめる視点

2013年12月、京都で(故)佐藤真監督の特集上映会が行われました。かねてから佐藤真ファンである私はTwitter上で「なぜ京都で上映会?遠すぎる」と愚痴を託っていました。そのつぶやきに反応したのは佐藤監督のかつての仕事仲間、映画編集者の秦岳志さん。「関東でも言い出しっぺさえいれば上映会はできますよ」。私はすぐにT-ACTフォーラムへ駆け込み、佐藤監督の『阿賀に生きる』の上映会を筑波大学で行う妄想をつらつらと語っておりました。

『阿賀に生きる』は、新潟水俣病の発生地である阿賀野川流域に暮らす人々を撮ったドキュメンタリー映画です。水俣病の悲惨さばかりを強調するマスメディアの表層的な捉え方へのアンチテーゼとして、佐藤監督は、普段見落とされがちな患者の“日常”に敢えて目を向けました。未認定患者の老人たちが稲を刈り、船を造り、酒に酔い、夫婦喧嘩をする愉快的日常風景の中に、さりげなく挟み込まれる彼らの震える手や、感覚障害のために火傷を負った足のショット。そこには、水俣病という「悲劇」の人々に対して私たちが向けがちな安易な同情や憐憫を否定し、彼らの“生”をそのまま肯定しようとする監督の倫理的狙いがあります。

1.25『阿賀に生きる』上映会

孤立無援、無茶無謀に始まった上映会の企画ですが、卒業論文と一緒に取り組んでいた比文の仲間を一人また一人と巻き込みながら、少しずつ具体化させていきました。

上映素材はDVDではなく、以前から憧れていた16ミリフィルムを、割高ですが自腹覚悟で配給会社から借りることにしました。次に決めねばならないのは、映写技師と上映後に講演してくださるゲスト。秦さんの紹介で、『阿賀に生きる』の撮影をされた小林茂さんに映写と講演の両方をお願いし、さらに映画の製作発起人であり、今も患者の支援活動を続けている旗野秀人さんをもう一人のゲストとして新潟からお招きすることにしました。

さらに驚くことに、佐藤監督のお嬢さんが実は現役筑波大生だということがわかり、上映会の運営に参加してもらえることになりました。嬉しい繋がりにすっかり調子づきましたが、最大の問題である謝礼費や運営資金に関しては、紫峰会からの支援な



『阿賀に生きる』上映会当日の様子

どをもってしても、結局大幅な赤字計算。ところが上映会の3日前に、学類長のご英断で上映会自体を比文の講演会扱いにもらえることになり、金銭面の問題は一気に解決しました。

そして迎えた当日。来場者は40人弱。上映中は観客から笑いも起こり、ゲスト講演では、小林さん旗野さんに映画のテーマや製作裏話を、ときに笑いを交えながらお話しいただきました。夜の懇親会でゲストと学生、先生方、学外の来場者が年齢も立場も超え、お酒を飲みながら話に花を咲かせる様子は、『阿賀に生きる』の一場面のようなものでした。



映写機をまわす小林茂さん

3.05『エドワード・サイド OUT OF PLACE』上映会

1.25の懇親会の席で比文の清水知子先生にお声をかけていただき、同じ佐藤監督の『エドワード・サイド OUT OF PLACE』の上映会を3月に開くことにしました。今回は、『OUT OF PLACE』の編集をされた秦さんと、清水先生のご紹介で映画の翻訳監修をされた中野真紀子さんをゲストとしてお招きしました。来場者は30人程度。雰囲気は『阿賀に生きる』のときと打って変わって、静かにじっくりと映画の提起する問題について皆で考える会となりました。

『OUT OF PLACE』は亡きエドワード・サイドの生の痕跡を辿りながら、中東問題や故国喪失者のアイデンティティの問題に迫った映画です。実はサイドの話は映画の前半だけで、後半は難民キャンプに暮らすパレスチナ人や、イスラエルの入植地に暮らすユダヤ人たちの“日常”が描かれます。社会問題や政治闘争の一元的な論理に収斂されがちな人々の“生”の多様な側面を描くという点では、この映画も『阿賀に生きる』と通じています。

二つの上映会を通して気づいたのは、大きい画面で、大きい音で、大人数で映画を観ることは、家で一人DVDを観るのとは大違いだということ。他者と感想を言い合い、製作者の思いを直接聞き、時間を共有することで、同じ映画でも観方がずっとと広がることを実感しました。

自主上映会、楽しいですよ。学生の誰かが続けてくれることを願っています。



『OUT OF PLACE』上映会の参加者と